

聖書日課 『からし種』 2020.2.2-2.9

<p>2日 (日)</p> <p>サムエル下 24章</p>	<p>「ダビデは…主に言った。『罪を犯したのはわたしです。わたしが悪かったのです』」(17節)。ある教会員の言葉。「聖書は正しいお詫びのあり方を教えてくれる」。人口調査をしたことを神に厳しくとがめられて民に多大な犠牲が出たとき、ダビデは王である自分の罪責を神の前に告白した。さて、わたしは神の前でどのように自分の責任を語る用意があるだろうか。</p>
<p>3日 (月)</p> <p>列王記上 1章</p>	<p>「彼(アドニヤ)は父から、『なぜこのようなことをしたのか』ととがめられたことが、一度もなかった」(6節)。親として子どもを正しく導くことの難しさを感じる。つい甘やかしてしまったり、叱るのではなく怒りをぶつけてしまったり。子どもと向き合う中で親は自らの未熟さを知らされることになる。今日、子どもたちに正しく向かい合う信仰と知恵を与えてください。</p>
<p>4日 (火)</p> <p>列王記上 2章</p>	<p>「わたしはこの世のすべての者がたどる道を行こうとしている。あなたは…あなたの神、主の務めを守ってその道を歩み、…主の掟と戒めと法と定めを守れ」(2-3節)。自らの死期を悟ったダビデは、王として第一にすべき心得をソロモンに語る。「主の務めを守って、その道を歩むこと」。大きな権力を与えられた者こそ、この戒めを心に刻むことの大切さを示される</p>
<p>5日 (水)</p> <p>列王記上 3章</p>	<p>「どうか、あなたの民を正しく裁き、善と悪を判断することができるよう、この僕に聞き分ける心をお与えください」(9節)。ソロモンは長寿でも富でもなく、また敵の命でもなく、正しく聞き分ける知恵を求めた。私たちは今日、神に何を願い求めるのか。「だれでも、聞くに早く、話すに遅く、また怒るに遅くあれ」(ヤコブ 1・19)。求める願いの順番を間違えないように。</p>

メール配信登録メール senfkorn.obc@gmail.com

メール配信希望の方は名前とアドレスを明記の上、上記のアドレスまで

<p>6日 (木)</p> <p>列王記上 4章</p>	<p>「ソロモンはイスラエル全国に十二人の知事を置いた。彼らは王と王室の食糧を調達した」(7節)。聖書はソロモンの知恵を賞賛する一方、その知恵が王宮維持に用いられたことを記す。「強いイスラエル」は人民の犠牲によって成り立っていたのだ。約千年後、ソロモンの知恵を凌駕し、すべての人を生かすイエス・キリストの命の言がもたらされたことを覚えない</p>
<p>7日 (金)</p> <p>列王記上 5章</p>	<p>「ソロモン王はイスラエル全国に労役を課した。そのために徴用された男子は三万人であった」(27節)。ここでも前章に続いて、王による民の徴用の実際が記されている。造営された神殿にはソロモンの名が冠されていくが、実際に神殿を建てたのは名もない人々の尊い労役であり、その背後にある貧しい人々の家庭の犠牲があったことを覚えない。</p>
<p>8日 (土)</p> <p>列王記上 6章</p>	<p>「神殿の建築は、石切り場でよく準備された石を用いて行われたので、建築中の神殿では、槌、つるはし、その他、鉄の道具の音はまったく聞こえなかった」(7節)。今から約三千年前の技術力の高さに感嘆せざるをえない。石だけでなく、木の加工から、青銅や金による備品の製造など、人々は与えられている最高の技術を神礼拝のためにささげたのだった。</p>
<p>9日 (日)</p> <p>列王記上 7章</p>	<p>「彼らの家長として系図に登録されている」(9節)。歴代誌には、イスラエルの民の系図が記される。系図に名が記されている者の数以上に、名もなき人たちがその背後に生きていた証が見える。聖書の中に描かれる人たちの後ろに、女性たちや名もなき存在の人たちの叫びと悲しみ、喜び、そして主への信仰が脈々と今の私たちにも続いていることを覚えない。</p>